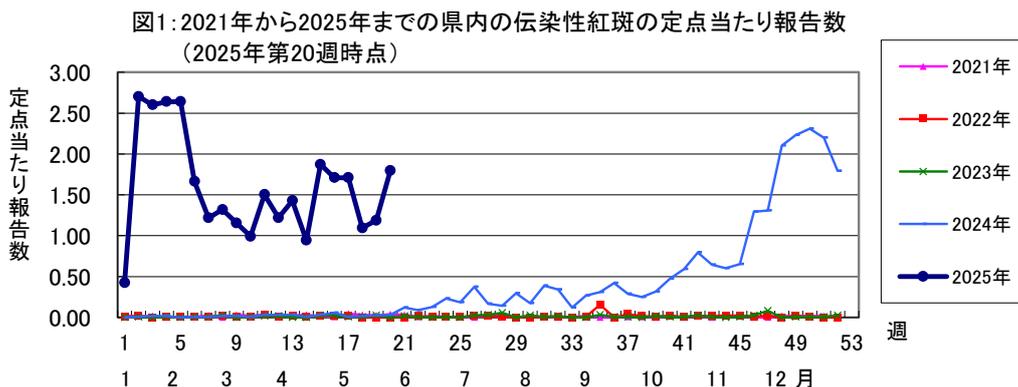


【今週の注目疾患】

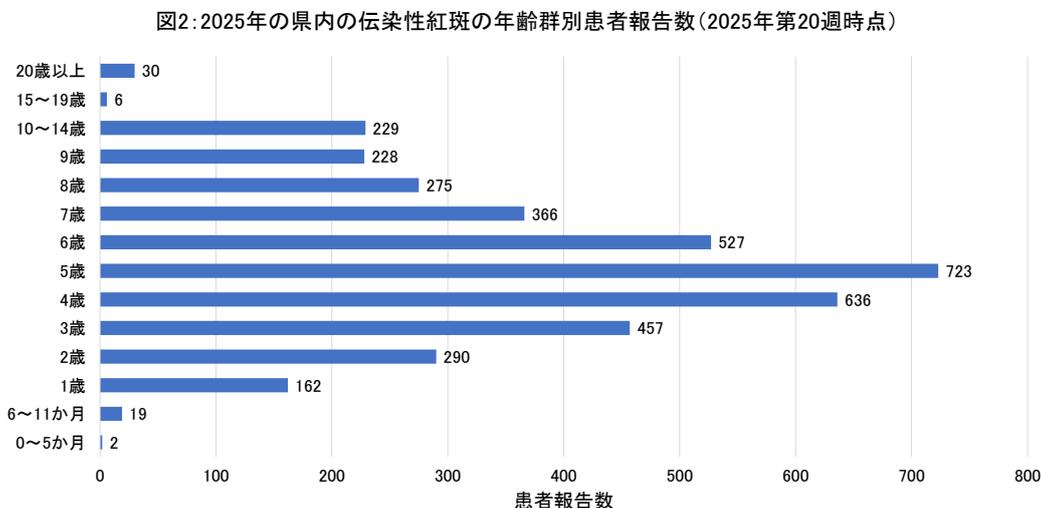
《伝染性紅斑（りんご病）》

2025年第20週における県内の小児科定点医療機関からの定点当たり報告数は、前週から増加し1.80（人）となった（図1）。保健所別では、市原5.67（人）、君津4.50（人）、船橋市／印旛2.00（人）が多かった。

1999年に現行感染症サーベイランスが開始されてから最も高い水準で推移していた第5週までと比較して減少こそしているが、全国同様、依然として例年より高い水準にあることから、引き続き注意が必要である。



2025年第1週から第20週までに報告のあった累計3,950例の年齢構成は、5歳723例(18%)、4歳636例(16%)、6歳527例(13%)であった（図2）。



本疾患はヒトパルボウイルス B19 を原因とし、幼児、学童の小児を中心にみられる流行性の発疹性疾患であり、「りんご（ほっぺ）病」と呼ばれることもある。

特徴的な症状として、感染後10日から20日の潜伏期間を経て、微熱やかぜの症状等がみられた後、両頬の境界鮮明な紅斑が現れる。続いて体幹部、腕、脚部にも網目状・レース様の発疹がみられる。発疹は1週間前後で消失するが、一度消えた発疹が短期間のうちに日光や熱（運動や入浴など）により再出現することがある。成人では関節痛を伴う関節炎や頭痛などの症状が出ることもあるが、ほとんどは合併症を起こすことなく自然に回復する。

感染後約1週間頃にウイルス血症をおこしており、この時期にウイルスの体外への排泄量は最も多くなる。なお、発疹出現時期を迎えて伝染性紅斑と臨床的に診断された時点は抗体を産生する頃であり、ウイルス血症はほぼ終息し、既に周囲への感染性はほとんどないといわれている^{1,2)}。

注意すべきこととして、伝染性紅斑に感染したことの無い女性が妊娠中に感染した場合、胎児に垂直感染し、流産、胎児水腫を起こすことがある¹⁾。

また、鎌状赤血球症などの溶血性貧血患者では貧血発作（aplastic crisis）を、免疫不全者では重症で慢性的な貧血を引き起こす場合がある^{2,3)}。

感染経路は飛沫感染もしくは接触感染である。職場、子供の保育園・学校等の周囲で患者発生が見られる場合、特に妊娠中またはその可能性のある方は、感冒様症状を呈する人との接触を可能な限り避けるよう、注意が必要である。また、手指衛生、咳エチケット等の一般的な衛生対策や体調不良時は自宅で安静にすること等、うつらない・うつさない予防対策が重要である¹⁻³⁾。

■参考・引用

1)厚生労働省：伝染性紅斑

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou/kekakukansenshou19/fifth_disease.html

2)国立健康危機管理研究機構：IDWR 2019年第14号<注目すべき感染症>伝染性紅斑（ヒトパルボウイルスB19感染症）

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/5th-disease-m/5th-disease-idwrc/8749-idwrc-1914.html>

3)国立健康危機管理研究機構：伝染性紅斑

<https://id-info.jihs.go.jp/diseases/ta/5th-disease/010/5th-disease.html>

【Topics】

《ゴールデンウィークに海外へ渡航された皆様へ》

感染症には、潜伏期間（感染してから発症するまでの期間）が数日から1週間以上と長いものもあり、渡航中や帰国直後に症状がなくても、しばらくしてから具合が悪くなる場合があります。その場合は、医療機関に事前に電話連絡して海外渡航歴があることを伝えた上で受診し、渡航先、滞在期間、現地での飲食状況、渡航先での活動内容、動物との接触の有無、ワクチン接種歴等についてお伝えください。その他詳細は下記をご参照ください¹⁻³⁾。

■参考・引用

1)厚生労働省検疫所 FORTH：海外へ渡航される皆さまへ!

https://www.forth.go.jp/news/20220722_00001.html

2)【感染症エクスプレス@厚労省】Vol.518（2024年8月4日）

<http://kansenshomerumaga.mhlw.go.jp/backnumber/2024-08-04.html>

3)【感染症エクスプレス@厚労省】Vol.519（2024年8月19日）

<http://kansenshomerumaga.mhlw.go.jp/backnumber/2024-08-19.html>